

市場での出会いとお弁当

「初の海外調査の地であるインドで、一人で行動する日に食べたお弁当のことを忘れることはありません！」と今でも胸を張って言えます。市場のお弁当の話にたどり着くまで、色々ありました…。

そうだ市場に行こう

調査も終盤に差しかかったある日の晩、突然、一人で過ごすことになりました。二週間ほど何事もなくインドに滞在していたとはいえ、いきなり一人で過ごすとなると心細くなりますし、不安も覚えます。ただ、普段よりも多めのお金を払ってホテルで食事をして、冷房の効いた部屋で仕事をすれば、ホテルの外に出ることなく一日過ごせます。また考え方を変えれば、なれない異国での現地調査でたまりにたまった疲れをとるには良い一日です。「なんとかなるな」と考え、その日は眠りにつきました。

気持ちよく晴れ渡った真夏日のある日、冷房のよく効いた部屋で、一人きりの一日が始まりました。朝食を終え、部屋で過ごしていると気持ちムズムズし始めました。私は仕事が嫌いなわけではありません。冷え性なわけでもありま

せん。テレビが嫌いなわけでもありません（テレビは電波の受信が不調で視覚的内容がよくわかりませんでした…。）部屋の中で考え事をしていると、ヨーロッパで行われた学会で一緒にいた先生の姿を思い出したのです。

学会終了後、何人かで会場の近くを散策し、市場（蚤の市？）を歩きました。その先生は、珍しい野菜やおいしそうな果物を見つけると次々に買い始めたのです。英語が通じない店主には、現地の通貨を手のひらに載せて、“信用”取引をしていました。「食べてみないと、良い悪いはわからないでしょ」というようなことを仰っていたのと、その豪快な信用取引がとても印象的でした。気持ちのムズムズの原因は、この思い出でした。

私は市場を目指すことにしました。頭の中では、私たちのような旅行者¹が、開発途上国の大衆レベルの生活を見ることはそうそうないと思っていました。しかし、熱気と活力がみなぎるインドの町や村を往復していると、人々の日常生活が見てみたいと思うようになっていました。そのような思いを胸に、私はホテルから出て、車やバイク、人にぶつかからないように砂埃が舞う中をテクテク歩きだしました。市場へ向かう道中では、信号や横断歩道がない片側3.7車線²の道を、現地の人やドライバーさんたちの好奇の視線を浴びつつ³、無事に渡りきりました。前日にスコ

ルのような雨が降っていたので、水たまりがたくさんありました。インドでは道路があらゆる生活の場になりうるので、私は水たまりの水も感染症の原因なるかもしれないと考え、現地の人には考えられないような回り道をしながら、“恐るべき”水たまりを避けてテクテク歩きました。ドラドラ歩いていると悪い人に声をかけられたり絡まれたりすると思い、早足でテクテク歩き、なんとなくあのあたりだろうと見当をつけていた市場に到着しました。

市場の色彩豊かな光景

広大な敷地の中に市場がありました。市場の中には、水はけの悪い土で覆われていました。前日の雨の影響が残っていたので、ここでも水たまりは私の極力避けるべき対象物となりました。しかし、車の往來を気にせずに自由に歩き回れる空間に、ホッとしました。市場の中は区画ごとに大きく区切られていて、店が整然と並んでいました。野菜ゾーン、肉ゾーン、日用品ゾーン、駄菓子屋(?)ゾーンという感じでした。大部分は、野菜ゾーンでした。車の往來が激しい埃っぽい道を歩いてきた私にとっては、その野菜ゾーンの色彩はとても魅力的に感じました(写真①、②)。次の写真はバナナ屋さんで、単色ですが、ディスプレイの仕方が日本のスーパーではまず

見られないので、私には印象的でした(写真③)。

綺麗に土が取り払われた野菜が並んでいました。調査で大半が土色だった半乾燥地を行ったり来たりしていた私にとっては、このような色彩豊かな野菜が並んでいる光景はオアシスのようでした。ぶらぶら歩きながらそのような光景を眺めていると、この野菜はどこから来ているのか疑問が湧いてきました。店番の人に野菜の栽培地を何度か聞いてみましたが、言葉が通じないことが続いたので、最終的には質問せずに、ニコニコ笑いながら市場をぐるぐる回っていました。

そうこうしていると、葉物野菜のキャベツを売っている店を見つけました。根菜よりも傷みやすそうなイメージの葉物野菜を見つけたので、このときばかりは言葉の壁を気にせずに、「どこで栽培しているか」お店の人に聞きました。お互いイメージを膨らませながらコミュニケーションをとっていると、周囲に人がどんどん集まって来て、ただ事でない様子になりドキドキしました。すると、どこかのお店の裏で働いていた高校生か大学生ぐらいの青年が英語で話しかけてくれました。あまりにも私の現地語でのコミュニケーション能力が低かったため、集まって来た人たちが英語を話せる人を探してきてくれたのです。ようやく、「どのあたりで栽培しているのか知りたい」とか、「栽培用の水はあるの？」など、色々聞くことができました。若い人



写真①綺麗に土が取り払われた野菜たち

25



写真②市場の色彩を豊かにする野菜の赤や緑

は英語が話せる人が多いです。コミュニケーションがとれ始めると、キャベツ売りの店主らから質問攻めにあい、その後は終始お店の人のペースで物事が進みました。

陽気な店主との出会いとお弁当

キャベツ屋の二人はとても陽気で親切でした(写真④)。「どこから来た？」から始まり、「スマ

ホを持っているなら写真撮らないかい？」と言って、ポーズをとってくれたりしました。「ヤシの実ジュースを知っているか？」と聞いてきて、突然「ビデオ、スタート！」と言いだし、売り物であるヤシの実を硬い岩にガツンとぶつけて、できた穴からほとばしるヤシの実ジュースの一気飲みを見せてくれました。ヤシの実ジュースを一滴もこぼさず、ジュースが滝のように落ちていく様子が分かるようにヤシの実を高く持ち上げ、口を



写真③売り物のバナナと店主の女性



写真④陽気で親切な店主たち

大きく開けて飲み干すその手際の素晴らしさにとても感心しました（ひょっとして取材慣れしている??）。その後も彼らとの会話は続きました。私の感じたインドの素敵なところを話していたときに、食事がおいしくて仕方がないということを言ったら、「俺たちのお弁当の味は知らないだろう?」といい、お弁当を差し出してくれたのです（写真⑤）。店主が今日食べるお弁当だと言われたので遠慮したのですが、結局は店主のご厚意に甘えてお弁当を頂くことにしました。

差し出されたのは、新聞紙に包まれたお弁当でした。最初に私が食べたインドのお弁当とは少し違って、バナナの葉ではなくビニール袋に包まれており、カレーソースの小袋はありませんでした。ご飯は既にカレーソースのようなものとの混ぜご飯風で、ご飯の上にゆで卵が一つ乗っていました。スプーンも一緒に渡してくれたのですが、私は店主のお弁当に敬意を払い、現地の流儀にのっとって食べました。みんなの視線を浴びながら右手でご飯を食べ始めると、



写真⑤実際にいただいた八百屋さんのお弁当

周りから笑い声を含めた歓声のようなものが聞こえてきました。何を言っていたかは定かではありませんが、身振りや手振りを見ていると「あの日本人、俺たちとおんなじように手で食べているよ」とでも言っていたようです。これは、日本人が外国人の箸使いに感心するようなことと似ていたのかもしれませんが。「おいしい、おいしい!」と私は観客たちに言いながら食べました。リップサービスではなくて、本当においしかったです。ビニール袋にご飯は包まれていましたが、ジュークジュークのご飯ではありませんでした。味はまるでカツオ出汁をとっているかのように和風風味のカレー味で、辛さも程よく、私のおなかにもう少しスペースがあればおかわりもしたいぐらいのおいしさでした。ゆで卵と和風カレーご飯の相性も抜群で、「少し辛みが強くなってきたな～」と思ったタイミングで、卵をかじると程よく辛みが中和され、またご飯に文字通り手を伸ばしてしまいました。

お弁当を食べた後は、お土産としてキャベツを一玉もらって帰りました。店主からはなにもかももらってばかりとなったため、一人になった私を市場に行こうと突き動かしたある先生の取引の姿とはほど遠いものとなりました。しかし、市場の陽気な店主たちとの出会い、リアルな家庭の味のお弁当、緑鮮やかなキャベツ、一人で過ごしたこの日は何事にも代えがたい思い出となりました。

た。この三カ月後に再び現地を訪れることになったのですが、日程の関係で市場を訪れることは叶いませんでした。いつか、あの人たちと“信用”取引を成立させることを夢見ています。

荒木良一

¹ 今回は旅行ではなく、お仕事です。

² 本当は片側3車線ですが、ドライバーさん達の空いているスペースを見つけてどんどん割り込んでくる技術で0.7車線ぐらい増えているのです。

³ 車・バイク社会ですので、暑い日中に外国人が歩いているのはとても珍しい光景です。